

「新之助」生育速報 No. 6

平成28年7月20日
村上農業普及指導センター

1 生育調査ほ・実証ほにおける生育状況（7月20日現在）

生育概況

草丈: やや長い 茎数: やや少ない 葉数: 並 葉色: やや濃い

○生育は、全体的に順調に推移している。

○茎数と葉色は、地域差がある。

○幼穂形成期（1回目の穂肥時期）が近づいている（十川で7月23日頃）。

※管内のほ場で葉いもちの発生が確認された（7月11日）。

○新之助生育調査ほ・実証ほの調査結果（7月20日現在）

調査場所	田植日	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数 (葉)	葉色 (SPAD)
関川村下関（関川）	5月18日	66	557	12.3	37.1
村上市牛屋（神林）	5月16日	64	474	12.8	33.6
村上市十川（朝日）	5月16日	68	447	12.9	36.3
平均	5月17日	66	493	12.7	35.7
指標値（暫定）	5月15日	58	540	12.0	33.0
【参考：十川（H26、27平均値）】	5月13日	58	448	12.9	32.8

※ 調査場所は、普及センターで設置のほ場

2 今後の技術対策

当面の管理のポイント

◎幼穂形成期（1回目の穂肥時期）を確認し、穂肥を遅れずに施用

- ・幼穂長が平均1mm以上となった時期が幼穂形成期となるため、幼穂長を必ず確認し、1回目の穂肥施用が遅れないよう十分注意する。
- ・穂肥については、出穂前25日～23日（1回目）と14日前（2回目）の2回に分けて施用する。
- ・穂肥量は、1回当たり1kg/10aとし、合計2kg/10a施用を基本とするが、地力や生育状況、気象予報から判断して、1回当たり1.5kg/10aを上限に施用量を調節し栄養凋落を防止する。
- ・出穂10日前以降の穂肥は、食味を低下させるので原則施用しない。ただし、異常高温（猛暑）で栄養凋落が予想される場合には、追加の穂肥も検討する。

◎水管理

- ・ 幼穂形成期以降は飽水管理とする。特に稲体は減数分裂期から出穂・開花期にかけて最も水を必要とするので水が不足しないようにする。
- ・ 異常高温、強風、フェーン時には速やかに湛水し、稲体の急激な蒸散防止に努める。
- ・ 異常低温が予想される場合には一時的に深水とし幼穂を保護する。
- ・ 輪番給水地域は、気象予報等に十分注意し、異常気象が予想される場合は給水可能な日にあらかじめ十分湛水するなど事前に対応できるよう水管理に努める。

◎いもち病対策

- ・ 常にほ場をよく観察し、葉いもちの発病を認めた場合には、直ちに防除する。
- ・ 穂いもちのほ場抵抗性は「弱」でわたぼうし並に弱い。
- ・ 穂いもち防除は、葉いもちの発生がない場合でも、出穂前の適期に粒剤を施用するか、又は出穂期の状況に合わせ、粉・液剤で2回（出穂期直前と穂揃い期）の予防を実施する。
- ・ 共同防除は、新之助の防除適期とならない場合が多いので、その場合には、新之助に合わせた防除とする。

◎カメムシ対策

- ・ 県病害虫防除所から6月29日に「カメムシ類による斑点米の多発生」注意報が発表された。
- ・ カメムシ類の住み処をなくすため、農道・畦畔の定期的な草刈りと本田内のヒエやホタルイなどの雑草を残さない。
- ・ 防除については、アカスジカスミカメを主対象とした殺虫剤の散布を行う。